

シンポジウム「復興まちづくりのコーディネート —東日本大震災からの復興プロセスから見たコンサルタントの新たな役割—」実施報告

姥浦 道生 東北大学

1. シンポジウムの目的

東日本大震災の発生から間もなく10年が経過しようとしている。この震災からの復興過程においては、被災者、行政、市民、学識経験者などさまざまな主体が関与し、また市街地の物的環境整備に関してだけでも防災集団移転促進事業、土地区画整理事業、公営住宅建設事業など、さまざまな事業が実施された。言うまでもなく、これらがばらばらな状態では、適切な意思決定ができず、また望ましい空間形成も困難となり、復興が進まないことになる。したがって、これらさまざまなステークホルダー、さらにはさまざまな分野にまたがる空間利用及びその実現のための各種事業などをコーディネートする役割が非常に重要であった。

今回、その役割を都市計画コンサルタントが担った事例が見られた。これは、これまでの平時のまちづくりにおいても、また復興まちづくりにおいても、あまり見られなかった動きである。彼らが具体的にどのような役割を果たし、それがどのように復興の進展に寄与し、また課題はどこにあったのか？

本シンポジウムは、復興まちづくりにおいてコーディネーターとしての役割を果たされた3名のコンサルタントの方々からのご報告と、それをもとにしたディスカッションを通じて、これらの点を明らかにすることを目的として開催された。

2. シンポジウムの内容

まず、釜石市の復興に携わられた伊藤義之氏（(株)建設技術研究所）から、コーディネートは、首長の意思表示から職員等の事業実施段階に至るまでの「縦のコーディネート」、さまざまな分野・復興整備事業をつなぐ「横のコーディネート」、さらには事業の実施に関する「斜めのコーディネート」という多面性を有するものであり、コーディネーターはそのいずれの場面にも顔を出す存在であったとの説明がなされた。

次に、女川町の復興に携わられた末祐介氏（中央復建コンサルタンツ（株））から、コーディネーターは、復興まちづくりデザイン会議をはじめとした調整の場を設定する存在であったとともに、そのような多種多様に設定された各主体の調整の場に顔を出す存在であったこと等について、

女川町の復興の流れとともに報告がなされた。

最後に、名取市の復興に携わられた安本賢司氏（パシフィックコンサルタンツ（株））から、復興まちづくりのコーディネーターとは、事業を円滑かつ迅速に進めるために必要なことを、事前準備を含めて行う存在であり、その際には特に「想像力」と「コミュニケーション能力」が求められるという指摘がなされた。

この後、姥浦のコーディネートのもとで、ディスカッションが行われた。そこでは、同じ「復興まちづくりのコーディネーター」ではあるものの3人の役割や制度的位置づけが異なっていたことによるメリット・デメリット、「いろいろなところに顔を出す」という役割の具体的な内容や効果、さまざまな「抜け」を埋める役割の重要性、さらにはコーディネーターの意思を計画等に入れ込むことの必要性と可能性、等に関して議論がなされた。

最後に、北原啓司弘前大学教授から、復興まちづくりにおけるコーディネート機能の重要性についてまとめられたうえで、平時のまちづくりにおける当該機能の重要性、さらにはその域内供給の重要性についても指摘がなされた。

3. シンポジウムを終えて

東北支部としては2回目のウェブシンポジウム開催であり、運営面でも不慣れなことだらけで不安も大きかった。しかし、当日は全国から100名以上の方のご参加をいただき、また運営も比較的スムーズに進行させることができたと考えている。特に、この復興まちづくりの話題は、広く全国に情報発信していくべきトピックであり、このようなウェブ開催の有効性を感じた次第である。



写真 女川駅前付近の現況